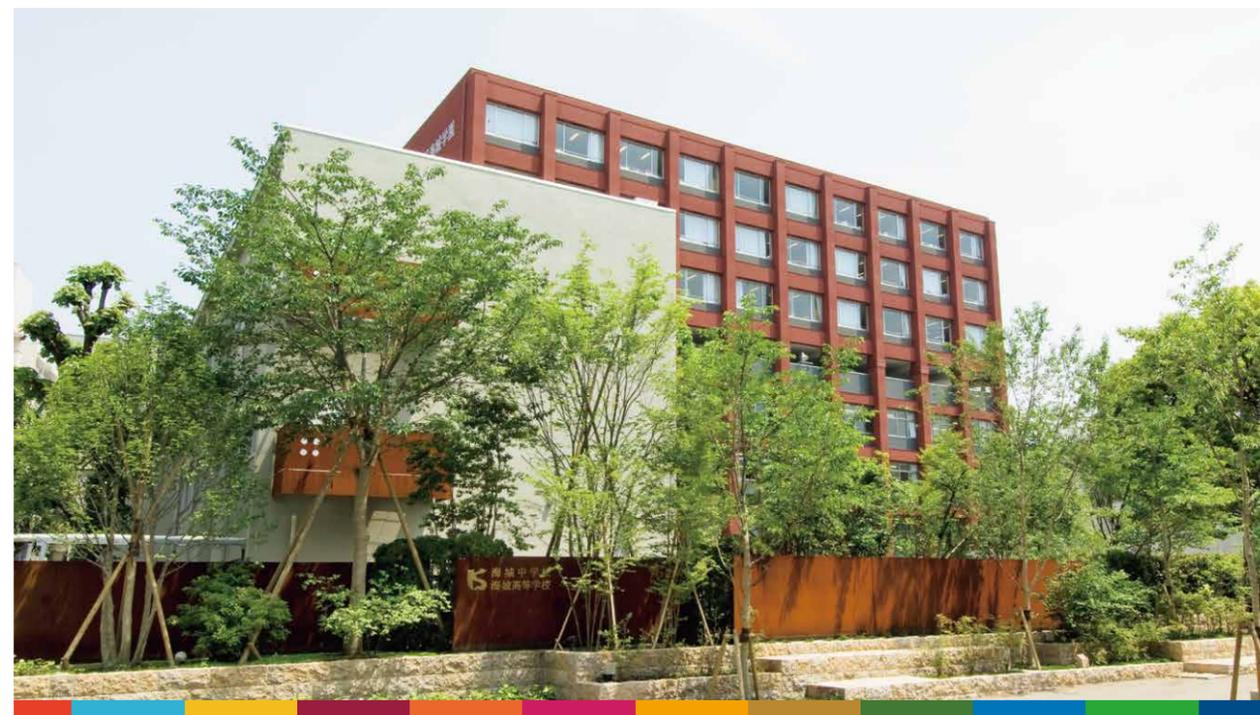


# 海城中学高等学校

KAIJO JUNIOR & SENIOR HIGH SCHOOL

SDGsを通して、  
課題に向き合い解決する姿勢と能力を育む



り組みの一つが「SDGsゼミ」だ。このゼミで生徒はSDGsを学び、持続可能な社会を実現するために自分ができることを模索する。SDGsゼミを中心となって推し進めた関口教諭はSDGsゼミ開講の経緯を語った。「国連がSDGsを採択した2015年に、生徒や他の教員と共にボルネオ島に。熱帯雨林の中で大きなアブラヤシのプランテーションが広がる光景を目の当たりにしました。このアブラヤシから採れるパーム油は食品や工業製品に多く使われる一方で、大規模栽培は環境破壊の大きな要因にもなっています。森林保全や生物多様性を考えるには人々の消費を含めた社会全体を考える必要があると体感しました。生徒に世界が直面する課題を包括的かつ根本的に考え、解決できる人材になってほしい、そんな思いでSDGsゼミを開講しました」

SDGsゼミでまず取り組ん

生徒の主眼的な意見が生んだ地球規模の課題を考える活動

だのは、17の目標を大切だと思ふ順に並べるワークショップ。SDGsを理解させるだけでなく、生徒同士の意見交換を通じて他者の考えに触れ、共感させることも目的だったという。「人と自然の共存をテーマに議論する中で、持続可能な社会の実現に向けて、自分たちが調べた内容を多くの人に発信したいという意見が活発に飛び交うようになりました」と関口教諭は振り返る。そうして始まったのが海の豊かさを考える「寿司ゲーム」と陸の豊かさを考える「象牙の密猟ロールプレイ」だ。



ゼミ内の寿司ゲーム班が考案したゲームの目的は参加者に環境に優しい消費のあり方



や、海の漁業資源を保全する重要性について考えるきっかけを与えることだ。生徒による調査や水産庁が公表するデータ、東京海洋大学の専門家への取材を基に、ゲームを考案。NPO法人開発教育協会(DEAR)が主催する研究発表の全国大会で披露したり、校内の生徒向けにワークショップを実施したりしたという。

また、象牙の密猟ロールプレイは、高価格で取引される象牙の売買の裏に潜むアフリカゾウの密猟をテーマにしたものだ。世界自然保護基金(WWF)の協力の下で生徒らが考案した、密猟とアフリカ地域の貧困・発展について、ロールプレイ形式のワークショップで包

生徒の興味を深掘りする  
KSプロジェクト「SDGsゼミ」

1891年の開校から130年近くの歴史を持つ海城中学高等学校は「国家・社会に有為な人材の育成」という建学の精神の下、リベラルな人間教育と個性ある学力の育成を目指してきた。グローバル化が進む国際社会や価値観が多様化する日本の成熟社会において、「有為な人材」とは、異なる人間同士が共生・協働するための「新しい人間力」と、困難な課題を解決に導く「新しい学力」をバランスよく兼ね備えた人材だ。

海城中学高等学校は2017年度から課外特別講座『KS(Kaijo School)プロジェクト』を開始。各教科のカリキュラムや通常授業の枠組みを超え、生徒の多様な興味や関心を深める学びを展開している。その取



関口 伸一  
グローバル教育部 理科教諭

## Pickup 1 海の漁業資源の問題について考える「寿司ゲーム」

ゲーム中で使用する「寿司カード」には魚種ごとの資源量や養殖の方法によって環境コストという指標が設定されている。ゲーム参加者が選択した寿司の環境コストが一定値を超えると、寿司の値段が変動するシステムだ。中には、水産資源と環境に配慮した持続可能な水産物を認証する「MSC(Marine Stewardship Council)」や、漁業従事者と漁村の地域社会にも配慮

した養殖水産物を認証する「ASC(Aquaculture Stewardship Council)」といったエコラベルが付いた寿司も存在し、これらの寿司は環境コストに影響を与えない。多くの魚を餌として消費する魚の養殖には高密度飼育による感染症予防として抗生物質を使用するため、環境コストが大きく設定されるなど、水産資源に関わるさまざまな要素が盛り込まれている。



School Information

海城中学高等学校 KAIJO JUNIOR & SENIOR HIGH SCHOOL  
〒169-0072 東京都新宿区大久保3-6-1 URL: https://www.kaijo.ed.jp/

## 生徒の主体的な意見と行動から 生まれた、多様な取り組み

### Pickup 4 福島の今を知り、未来を考える 福島ボランティアツアーを実施

2019年度からイマ・ゼミの一環として、福島ボランティアツアーを実施。ツアーの目的は、現地で農業に取り組む人や、その活動を支援するNPO法人・ボランティアの思いに触れること。まず原発事故による風評被害を受け、これまで行ってきた作物栽培ではなく新たにオーガニックコットンの栽培を始めた農家の草刈りや泥さらいを手伝った。また、震災時にボランティアを受け入れた旅館(古滝屋)への訪問、古着リサイクル関連事業などを通じて地域に貢献するNPO法人(ザ・ピープル)や震災を体験した現地の住民との対話を通じて、生徒は人のつながりの重要性を実感したという。ツアー後、ツアーの継続を希望する声が多く挙がり、今後も福島のためにできることを検討していく予定だ。



流し、目に見える形で貢献する活動を実施することに力点を置く。この活動の狙いは生徒たちの「非認知スキル」の向上に定められている。非認知スキルとは、個別の知識や技能、思考力や判断力、表現力などの可視化できる「認知スキル」に対して、主体性、多様性、協働性、学びに向かう力、人間性など、可視化が難しいスキルだと言われている。「人は直面した課題を、他者との協力や解決へのモチベーションで打開します。社会に出てから経験するのは

なく、中高生の時から自身と社会のつながりを意識したり、問題解決に必要な考え方や手段も感覚的に身に付けたりすることはとても大切です」と関口教諭は非認知スキルの重要性を語る。「人の感情」「文化・歴史的背景」「地域性」に触れて、非認知スキルを向上させるという目的を持つイマ・ゼミでは、2019年度に「福島ボランティアツアー」を実施。放射能汚染による風評被害の影響でそれまで従事していた農作物の栽培が難しくなり、無農薬裁

### Pickup 5 JAXAと連携し、非認知スキルを 高める未来型教育を開発する

宇宙飛行士は、国際宇宙ステーション(ISS)という狭い空間の中で国籍や専門が異なるメンバーと共にミッションを遂行する。危機に際しては全員で協働し、問題解決に当たらなければならない。JAXAは宇宙飛行士にとって必須となる非認知スキルの評価法や訓練法に関する知見を蓄積しており、宇宙産業で事業を展開するSpace BD、Z会グループと共に「非認知スキルを向上させる教材の開発」に取り組んでいる。海城中学高等学校は日本で唯一の実践校として参加。学校現場での研究結果をフィードバックすることで、急激で予測不能な変化を遂げる現代社会で活躍できる人材を育成する未来型教育の開発に取り組んでいる。



培のオーガニックコットンの栽培に踏み切った農家を手伝った。農家の喜ぶ顔を見て、生徒は大きなやりがいと達成感を感じたようだ。また、現地の住民やボランティア支援者と交流し、故郷の復興を願う気持ちと共有した。後日、帰宅困難地域に張られたバリケードの手前まで行き、福島の実情とエネルギー問題の深刻さを肌で実感したという。同年12月には、24名もの生徒がいわき市の災害ボランティアにも参加した。

同校では宇宙航空研究開発機構(JAXA)と連携して、生徒たちの非認知スキルを高める研究を進めている。JAXAに蓄積された宇宙飛行士の非認知スキルを評価する方法や訓練する方法のノウハウを教育現場で活用することが目的だ。「生徒の学力向上だけでなく、課題に向き合い、解決する姿勢と能力を育むことも学校や他者との協働に繋がる非認知スキルの育成はこれからも続けていきます」(関口教諭)

### Pickup 2 密猟問題を多角的に議論する 「象牙の密猟ロールプレイ」

ゲーム参加者は政府関係者・密猟組織メンバー・象牙を売買する商人・密猟を行う村の住人などを演じ、象牙の密猟に関する法整備の会議を行う。各々の立場から意見を出し合い、限られた時間の中で結論を出す。これまで「貧困問題や紛争といった地域社会と密接に根付いた問題がアフリカ象の密猟につながる」、「国際条約や保護区設立には、複数国の連携が必要」といった議論になったことも。割り振られた役割から物事を考えることで、新たに発見できることは多い。このワークショップを考案した象牙班の生徒は現在、WWFへの取材や調査を重ね、ワークショップ活動の教材化を目指している。



括的に考える。象牙の密猟に関する教材が少ないことを知った象牙班の生徒は、現在クラウドファンディングで資金を募り、教材として出版することを計画中だという。これらの活動に取り組むうちに、問題意識は徐々に身近なものにまで及ぶようになった。例えば、家庭科の授業でジェンダー問題を取り上げると、後日生徒から「ジェンダー問題の解決に挑むのは女性が多い印象。男性にもできることはないか」という意見が挙がり、ゼミ内に

ジェンダー班が発足した。男女の経済格差や女性の社会進出などのジェンダー問題を調査し、ジェンダー平等を啓発するシンポジウムで男性同士の啓発活動の方法と有効性に関する発表を行った。「世界の大量生産・大量消費という経済活動や、権力構造にはジェンダーが関わってきたと考えられています。ジェンダーに関する学びは、貧困問題や環境破壊の課題にもリンクします」(関口教諭) そのほかにも、学校生活の中でエコーラベルを発見し、教員の

元へ報告に来る生徒や、SDGsゼミの活動を通じて環境保全への関心を高め、進路決定をした生徒もいるようだ。持続可能な社会のために何ができるのか。SDGsは自身の将来と向き合うレンズとしても大きな意味を持つだろう。日本の今を知り、将来をイマジネーションする「イマ・ゼミ」へと発展

SDGsゼミの多様な取り組みは、生徒の考え方にさらなる影響を及ぼし始めた。「SDGsは流行や自己満足、机上の空論に留まっていけない」、「SDGsの裏にある文化的背景や、そこに関わる人の感情などの本質的な問題を考えるべきではないか」という批判的な意見が上がってきたという。「まずは日本社会が抱く課題にしっかりと目を向け、できることを実行するため、SDGsゼミから『イマ・ゼミ』という名前に変更しました」と関口教諭は振り返る。イマ・ゼミではさまざまな問題に直面する当事者と直接交

### Pickup 3 ジェンダーに関する広い視野と深い見識を身に付ける

ジェンダー問題に取り組むジェンダー班は2018年度に発足した。同年、資生堂と国連女性機関(UN Women)が開催した「ジェンダー平等啓発ワークショップ2018」に参加。同年6月には資生堂とUN Womenによる講演を受け、女性の教育・就労機会の保障や、男女の賃金格差について学んだ。10月には国連大学で開催されたイベント「HeForShe すべての人

が輝く社会を目指して ~Generation Zからの提言~」に、生徒3名が参加。男子同士の啓発活動が有効であることを示し、その具体的な方法を提言した。2019年度は聖心グローバルプラザで開催された「みんなのSDGsシンポジウム〜次世代・女性のエンパワメントとSDGs〜」に生徒3名が参加し、経済活動や政治における女性の社会進出に関する研究発表を行った。

